

樽前山麓国有林の台風被害と復旧の記録

昭和 29 年（1954）北海道に未曾有の台風と呼ばれた洞爺丸台風が来襲し、大雪山麓の森林や樽前山麓の森林など北海道の主要な森林地帯に大きな風倒木被害が発生しました。その跡地復旧に多くの人々が取り組み、幾多の困難を克服した成果がようやく実りつつありました。平成 7 年、風害後、40 年を契機に、関係行政機関、関係林産業会等による「よみがえった森林記念事業実行委員会」が発足し、数々の記念事業が行われ、記念誌も発行されました。

しかし、その記念事業の 10 年後、つまり、大台風襲来 50 年後の平成 16 年 9 月 8 日、ようやく復興なった森林に再び。大型の台風 18 号が本道に上陸、道内の森林に大きな被害をもたらしました。中でも、洞爺丸台風当時、大雪山系森林に次いで壊滅的な被害を受けた樽前山麓の復興森林が再び大きな被害を受けることになりました。

過去 50 有余年の間に二度にわたって、大きな台風被害を受けた樽前山麓森林の被害復旧状況について、当会が収集した資料にもとづいて紹介したいと思います。

まず、最初の洞爺丸台風による樽前山麓の被害復旧について、昭和 34 年から退職する昭和 41 年まで、樽前山麓の国有林を管轄する苫小牧営林署の署長として率先垂範して森林復旧事業に取り組んだ故金田一さん(注)ご遺族から北海道技士会に提供され写真に基づき当時の復興状況を紹介します。

なお、当時は、風害跡地の早期復旧（大面積造林）は、木材供給の要請に基づいた施策（拡大造林）と重なり合った時代であり、これを契機に機械化や造林など森林施業技術は大きく発展することとなりました。

平成 16 年の被害状況についても当会で撮影記録した写真等によって順次紹介する予定です。

(注)

金田一さんは、戦前の昭和 10 年(1935)から戦後の昭和 60 年(1979)までの約 45 年間にわたって北海道の国有林(昭和 22 年の林政統一までは御料林)で森林・林業に関わって活躍されました。

戦後、北海道の森林・林業は、戦時下で荒廃した森林の復旧が始まりましたが、昭和 29 年、北海道を襲った未曾有の洞爺丸台風により、道内の多くの森林に風倒木の被害が発生し、風害木の搬出とその跡地復旧(植林)に官民あがて多くの経費と人手が投入されました。時あたかも日本は、戦後の経済復興の時期に重なり、道内の林産業はこの風害木の処理を契機として木材需要の増大に対応した木材生産が行われるようになりました。

昭和 29 年の洞爺丸台風当時、金田さんは帯広営林局白糠営林署の署長でしたが、その後、昭和 32 年から北海道営林局上芦別営林署の署長、昭和 34 年から退職する昭和 41 年までは苫小牧営林署の署長として率先垂範して森林復旧事業に取り組みました。特に、苫小牧営林署長時代は、層雲峡などとともに道内でも有数の大被害地となった樽前山麓の跡地復旧に 7 年の間、営林署長として取り組まれました。その当時の状況が一冊のアルバムの中に、当時では珍しい数多くのカラー写真(スライド)として遺されております。

また、金田さんが遺された戦前の資料の中には、御料林時代の森林・林業に関する技術情報誌である「御料林」の抜粋綴りがあります。これらの資料には、当時の置かれていた森林・林業の状況や森林施業の研究内容などですが、若き日の金田さんが森林施業に当って参考にした教材であったことが伺われます。

金田さんは、今から 10 年前、私(西川)が洞爺丸台風後 40 周年の記念事業実行委員会の取材時に、決して、自分のなされた業績を自慢する風は、みじんもみられず、「森林施業の成果の判断には長い時間が必要である」、「自然の回復力はすばらしい」、「森林施業の手本は先輩の残した造林地である」などと語っておりました。

(文責:北海道林業技士会事務局長西川)。

洞爺丸台風被害跡地モーラップ地区の復旧状況



昭和 34 年頃の風害跡地。前方に見えるのがモーラップ山。風倒木処理が終わり、植林が始まろうとしている。

(金田 一氏撮影)



昭和 35 年 (1960) 全国植樹祭会場 丸山 315 林班

(金田 一氏撮影)



昭和 35 年 (1960) 全国植樹祭
昭和天皇・皇后両陛下下来場。

(金田 一氏撮影)